徳島新聞　　令和7年7月16日（水）

徳島大病院

「1型糖尿病」新治療法実現へ

10月にも治験開始

徳島大学病院の研究グループは15日、血糖値を下げるホルモン「インスリン」が分泌されなくなる1型糖尿病の根本的な治療を目指し、患者自身の細胞から作製したインスリン産生細胞を移植する臨床試験（治験）を10月にも開始すると発表した。治療効果や安全性を確認し、2030年までの新治療法の確立を目指す。

インスリン産生細胞は、患者の脚の付け根から1ミリグラム程度の皮下脂肪組織を採取して作製する。さまざまな細胞に分化できる幹細胞に精製し、培養したインスリン産生細胞を腹腔鏡手術で患者の腹部に移植する。

今回の治験は患者3人程度を想定。安全性が確認できれば対象を20～30人に拡大し、手作業の細胞作製工程を機械化する方法を開発する。マウスや豚を使った動物実験では、治療の有効性や安全性が確認されている。

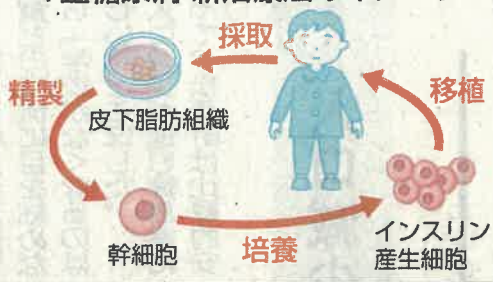
インスリン産生細胞は薬事法が定める薬に分類される。医薬品医療機器総合機構（PMDA）の承認を経て、一般の患者が新治療法を受けられるようになる。

1型糖尿病は、膵臓（すいぞう）の細胞が自己免疫などに壊されて発症し、患者数は10万～14万人とされる。子どもの頃に発症する例が多く、重症の低血糖になると突然意識を失うこともある。体質や生活習慣などが原因の「2型」とは異なる。

徳島大学病院はインスリン産生細胞を自動培養する機器の開発資金などをクラウドファンディングサイト「Otsucle（おつくる）」で募っている。目標額は2千万円。11月末まで。

研究グループを率いる池本哲也教授（消化器・移植外科）は「子どもを含め、1日に何度もインスリン注射を打たなければならない1型糖尿病は過酷な病気。新しい治療法の実現に向けて支援をお願いしたい」と訴えている。（山口和也）

1型糖尿病 新治療法のイメージ



徳島新聞令和７年７月１６日掲載
コピー、転載禁止